

繁殖部会から

こんなふうにご利用したい？

超音波機器

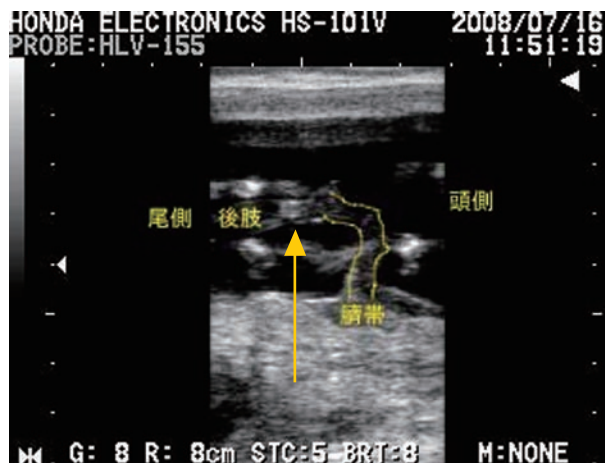
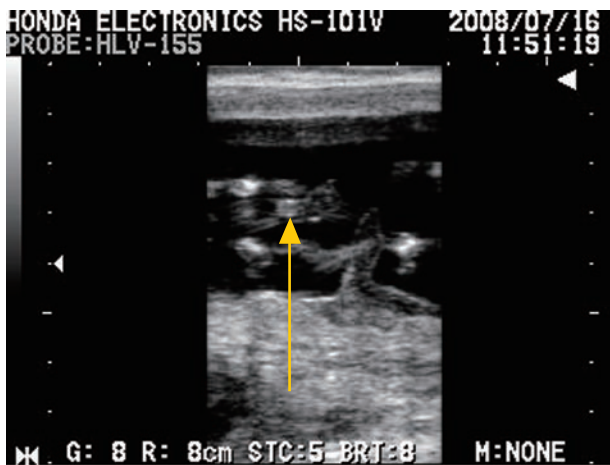
最近の飼料価格の高騰により、北海道酪農界はかつてない危機に曝されています。このような現状のなか、農場の繁殖効率というものはますます重要性を帯びてきていると言われていています。私自身も釧路地区にきてから多くの農家さんの繁殖状態を目の当たりにしてきましたが、やはり繁殖効率の良い牛群管理をされている農家さんは経営状態も良いということを実感しています。

そんな中、この度共済組合の各診療所に携帯型の超音波診断器が導入されました。なぜ携帯式かともうしますと、牛の繁殖検診に利用することを目的としているからです。今まで繁殖検診は獣医師が直腸検査により、卵巣や子宮を触診し、状態を確認して適切な処置を施すというやり方で行われてきました。もちろんこれからもこの方式が大きく変わることはないでしょうが、その補助手段として超音波が利用できる可能性があります。具体的には他N O S A Iでも取り組まれている、授精後早期（約30日）での妊娠診断や、60日前後の雌雄判別などです。

ある時、繁殖障害でよばれた農家さんで超音波機器を持参し、肩にぶらさげて直腸検査をしていました。「2ヶ月前に流産してその後初めて診てもらう牛だ。」と診療依頼され、当牛に直腸検査で黄体を確認しました。「黄体があるのでP Gを打ちますから3日後くらいに発情が来たら付けて下さい。けどせっかくエコーを持ってきたからちょっと診てみましましょうか。」と超音波診断機を使用してみたところ子宮内に胎児が確認されました。「そんなはずない。種付けしてないよ。」といわれましたが再確認をお願いしたところ、「わるい、40日前につけてたわ。」との答えが返ってきました。もちろんその後のP G投与は中止しました。一受胎の価値は15万～20万とわれています。ここで超音波機器をもっていなければこのような確な判定は出来なかったし、20万を尿溝に捨ててしまっていたかもしれません。この農家さんは常時分娩間隔を13ヶ月前後に保っておられる比較的繁殖管理の良い農家さんでありました。私は超音波機器の有用性を強く感じたことは言うまでもありません。これはとある偶然の一例かもしれませんが、現場では比較的よくある話のような気がいたします。

授精後早期の妊娠診断や雌雄判別を行う技術は、器械を使いこなし熟練するという行為がなけ

れば確立できません。この技術習得を今後釧路地区N O S A I 繁殖部会のテーマの一つにしていけたらと考えています。実際に胎児を雄と判定した事例を記載しました。動きがないのでわかりづらいとは思いますが臍帯の付け根部分の後ろに白く光る2本の線が観察されます。



解説図（左のエコー写真）

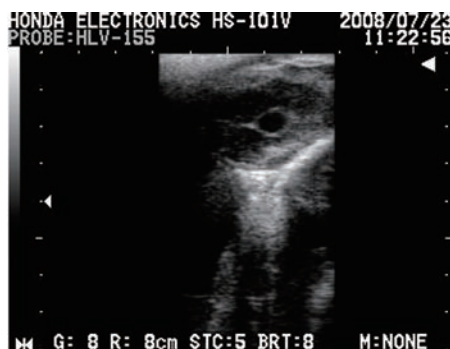
胎児を腹側から見たエコー像（同一牛）

臍帯の付け根部分に雄の生殖結節が観察されます。

また授精後40日で発情兆候を示し、授精依頼受けるも、精液注入棒の子宮頸管通過困難で授精不可であった牛に超音波検査を実施しました。右卵巢に内腔を有する妊娠黄体と、右子宮内に胎児を確認しました。直腸検査では診断困難な確認が、携帯超音波機器により可能となりました。



子宮内の40日令胎児



右卵巢に存在した内腔を有する妊娠黄体

超音波診断は、子牛の病気や、運動器病にも応用範囲が広がっています。このように用途は多様にある超音波機器による検査を、酪農現場においていかに有効に活用できるか、スムーズに無理なく実施できるかを模索していくことが今後に課せられた課題かなと感じております。

（釧路地区N O S A I 繁殖部会 阿歴内診療所 有田 光義）